

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 27 日現在

機関番号：35310

研究種目：「基盤研究（C）」

研究期間：2009～2011

課題番号：21520090

研究課題名（和文） 西田・田辺哲学と対称性原理との関係性について

研究課題名（英文） On the Relationship between the Philosophies of Nishida and Tanabe and the Principle of Asymmetry

研究代表者 尾崎 誠

(Ozaki Makoto)

山陽学園大学・総合人間学部・教授

研究者番号：00259574

研究成果の概要（和文）：

西田・田辺哲学の思想史的原型を古代中国の易の陰陽、及び古代インドのウパニシャッドの梵我一如に遡源し、特に田辺哲学の「種の論理」における世界宗教と世界政治との相互否定的関係性を闡明した。しかし、田辺哲学は点的現在中心に限定され、幅と持続性を有した歴史観として、ハイデッガーの元初論や存在史、ホワイトヘッドのプロセス、儒教・仏教の上昇・下降史観、キリスト教の終末論との比較関連において更に脱構築すべきである。

研究成果の概要（英文）：

The intellectual historical prototypes of the philosophies of Nishida and Tanabe are traced back to the ancient Chinese concept of Change and the ancient Indian idea of the unity of Brahman and Atman. In particular, Tanabe's Logic of Species is articulated with regard to the mutual negation of religion and politics on the world level. Even if so, however, as far as Tanabe's philosophy is restricted to the present moment, it should be further deconstructed towards the epochal and durational view of history in comparison to Heidegger's idea of Beginning and History of Being, Whitehead's concept of Process, Confucian and Buddhist view of history as progress and decline, and Christian eschatology.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000円	420,000円	1,820,000円
2010年度	1,000,000円	300,000円	1,300,000円
2011年度	1,100,000円	330,000円	1,430,000円
年度			
年度			
総計	3,500,000円	1,050,000円	4,550,000円

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：思想史

キーワード：比較思想史、宗教哲学、京都学派、弁証法、永遠、歴史、別の元初、客体的不滅性、

1. 研究開始当初の背景

西田・田辺哲学は仏教の空や老荘思想の無の概念を中心とした近代日本における東西思想の総合統一を企図したものであるが、その歴史的背景には古代インドのウパニシャッドの梵我一如や古代中国の易の陰陽思想の対称性と非対称性の関係があり、更にプラトン、ヘーゲル、ハイデッガー等の影響を強く受け、それらとの比較を通じた構造説明が必要であった。

当時、ノーベル物理学賞を受けた小林・益川理論は宇宙の起源・成立に関して物質と反物質との対称性の崩れという非対称性を見解を打ち出し、それが東洋の易の陰陽の原理とも深く通底することを思想的視座からも検証する動機があった。

また田辺に直接的にも大きな影響を与えたハイデッガーには生前未公開の重要文献が多数あり、特に第二の著書とも称される『哲学への寄与』は没後に出版され、田辺自身も当時未見であった事情からして、そこに盛られている根本概念「別の元初」や「最後の神」等について、田辺哲学との比較及び関連性を探求する必要性があった。

またハイデッガー研究は本場のドイツでは下火となり、一時は日本で盛んであったが、近年は英語圏での翻訳や研究が顕著となってきている。西田哲学についての欧米での研究も比較的增加しているのに対して、田辺哲学については依然として少ない現状にあり、今日世界共通語としての英語による田辺哲学の世界への新たな発揚も希求される状況下にあった。

更に西田・田辺哲学の根本概念「絶対無」についても、単に禅的背景のみならず、より広い思想的視野から老荘的及び仏教哲学の精緻な体系たる中国天台哲学との関連性について本格的な比較も必要であった。

また西田・田辺哲学とドイツ哲学との比較関連については従来も多く言及されているものの、イギリス経験論の伝統から出来たホワイトヘッドの不可逆的非対称的時間論的形而上学との比較関連についての研究は未だ充分には展開されていない現状に鑑み、特に相対性理論や量子力学等現代科学理論についての問題意識を共有するホワイトヘッドと田辺との比較研究は思想的にも極めて重要な課題であった。

2. 研究の目的

西田・田辺哲学の歴史的背景の究明と同時に、その両者の差異をも闡明し、特に西洋哲学の影響を重要な構成要素として分析し、ヘーゲル弁証法やハイデッガーの後期思想における「別の

元初」や「最後の神」、「性起」（「原生起」）の概念、及びホワイトヘッドのプロセス思想における「永遠的客體」や「過去の客体的不滅性」等における主体と客體との生滅に関する弁証法的構造、等との関連において、西田の「絶対矛盾的自己同一」や田辺の「否定的轉換」を軸とする類・種・個の三極弁証法論理との比較を通じて、その脱構築的展開を目指す。

宇宙の起源たる対称性の破れは、ホワイトヘッドの時間の不可逆的非対称性と易の陰陽の非対称性に対応する。中国では易の原型から事理、体用、本迹の否定的統一として相即不二の論理が形成される。他方、現実否定的、永遠性志向のインドでは仏教の空の原理が確立され、老荘の無と共に、近代日本では西田・田辺の絶対無へ至る。西田の絶対矛盾的自己同一は対称性を、田辺の否定的轉換は非対称性を表す。両者の差異を思想的に遡源しながら、その思想形成に影響を与えた諸要素を元初と終末、時間の不可逆性・因果性、啓示・受肉と再来、流出論等の連関において比較思想的観点から分析し、かつその総合統一の可能性を対称性原理との関連において追及する。

田辺の最終対決局面のハイデッガーの存在の本質としての性起(原生起)と脱性起との対称性、無の生起、最初の元初と別の元初との非対称性、又ハイデッガーに影響したシュリングの原偶然や根源的の神人一体性を田辺の背景たる仏教思想の体系化たる天台の法性と無明の関係と比較し、更にシュリング、ヘーゲルを媒介する根源一者ディオニュソス神と法華經の久遠仏との比較を通じ、田辺自身の言及しなかった限界を超えて、本来的対称性と現実的非対称性の関係から差異と同一性の構造を究明する。西田の絶対矛盾的自己同一と田辺の否定媒介的統一を軸に、善悪、歴史と永劫回帰、必然と偶然、観想と行為、の二元対立性を弁証法的統一へ向けて比較思想的視野から考察する。

田辺の後期マラルメの芸術哲学に見られる瞬間的「動源」概念とハイデッガーの歴史的「別の元初」論とを比較し、その思考法の歴史的背景を探る。前者は仏教的空、特に天台哲学の絶対待観、後者はキリスト教的終末論の文化的限定を受け、また「空亦復空」の論理はヘーゲルの「同一性と非同一性との同一性」の弁証法とも対応し、更にヘーゲルの第三の新しい宗教、ハイデッガーの最後の神、田辺の理念的世界宗教との相互関連性の構造を解明する。またヘーゲルの「未展開の統一から自己否定・自己外化を媒介して再び本来の自己に還帰する全体性の回復」の運動、ホワイトヘッドの非対称的不可逆

的時間論の構造過程、西田の絶対矛盾的自己同一、田辺の否定的転換の各原理の比較とその統一可能性を、その思想史的パースペクティブから探求する。

3. 研究の方法

関係する文献の哲学的解釈学の方法によりその含蓄する意味の隠れた深さを現代的に顕現させるべく、また東西思想の比較思想史的視座からも、脱構築的解釈を施す。具体的には、特に夏季に集中的にケンブリッジ大学、ミュンヘン大学においてヘーゲル、ハイデッガー、ホワイトヘッド、キリスト教神学等の文献調査・資料収集をしながら、同大学の海外研究協力者とも適宜情報及び意見交換を図り、邦文のみならず英文でも研究内容を国内及び国際の諸学会・国内及び外国学術誌にて開陳した。

(1) 具体的には2009年度においては夏季の期間、世界最大規模のケンブリッジ大学図書館において同大学終身客員研究員として、キリスト教神学、特にカール・バルト以後の現代ドイツにおけるモルトマン、パネンベルク、ユンゲル等の哲学的神学思想、及びイギリスにおけるジョン・ヒックの宗教的多元論等に焦点を当てながら、更に新プラトン主義、ホワイトヘッド、ハイデッガー哲学に関する最新の動向を文献調査・資料収集し、研究協力者たる神学部長・リプナー教授とも比較宗教的観点から西田・田辺哲学の根本概念「絶対無」のインド思想的背景について対話し、仏教の「空」概念との影響関係をウパニシャッド以来の思想史的視野からその連続性・非連続性等について討論を深めた。

ミュンヘン大学では、研究協力者の元日本学研究所長、西田・田辺哲学の権威・ラウベ教授と最新のドイツにおける西田・田辺哲学の研究動向、ハイデッガーの非隠蔽性としての真理観に関する「現れ—隠れ」の二重構造と法華経の開頭のプロセスとの隠れた対応関係、その真有(原存在)の性起(原生起)としての別の元初、及び最後の神とキリスト教神学における終末論及び仏教の末法観、また中国伝統の上昇・下降史観との関連性について広汎に討論を深めた。また関連の文献調査・資料収集も州立図書館等で行った。

更にライデン大学ケルン研究所にて法華経の英訳「ケルン・南条」本のサンسكريット語原典等について調査し、エラスムス・ロッテルダム大学ティメルスマ教授等とインド思想史上におけるその位置と意義について、そしてハイデッガー、西田・田辺哲学との隠れた関係性についても議論を深めた。

国内では日本ホワイトヘッド・プロセス学会(東京)においてホワイトヘッドの汎心理主義と中国天台哲学の草木成仏原理の関係性、及びホワイトヘッドの時間の累積的不可逆性と田

辺哲学の行為的否定的転換の非対称性との関係性について研究発表を行った。

(2) 2010年8月においてはカナダ・トロント大学にて開催された第20回国際宗教史・宗教学会議での比較研究部門において個人研究発表「田辺の種の弁証法による宗教と政治」について、又「宗教の深き合理性」のラウンドテーブルでも「ウプサラ学派ポストレームの宗教哲学と天台思想」について各英語で発表を行った。田辺の種の弁証法論理による政治と宗教との関係性の問題は、今日のグローバル化した世界では極めて重要な意義を有し、田辺当時を超えた歴史的先見性に富む洞察力と現代世界への応用性に富む論理を開陳した。又これと関連して、西田・田辺哲学の思想史的背景をなす仏教思想、特にその最も体系的な天台思想はドイツ観念論の影響を受けたスウェーデン・ウプサラ学派のポストレームの絶対観念論と極めて類比的対応性にあることが、キリスト教神学やシェリング、ヘーゲル等の研究からも明らかとなり、「宗教の深き合理性」のテーマに相応しく、史上初のスウェーデン宗教哲学と仏教哲学との比較を行った。中国的思惟の精華たる天台思想は、西田・田辺哲学の相即不二や否定媒介的論理の歴史的先行態をなすもので、従来の禅の一面に偏った見方を超えた視点から、その特質たる多様な要素を構造的に総合統一化するという歴史的方向性において、新しい比較思想史的展望から世界思想史の根源的普遍的構造を解明した。

特にハイデッガーも西洋で最も深い思想家と高く評価するシェリング思想は天台思想とも実に隠れた対応性を示す。又シェリングの原偶然概念は京都学派の九鬼周造にも影響を与え、田辺晩年のマラルメ論においても偶然性はキータムをなし、シェリング自由論は悪の問題をはじめ、西田も晩年は絶対者に悪の契機を認め、天台の性悪説に近づき、田辺の善悪の対称性・非対称性とも絡み、その別の表現たる「必然—偶然」の関係は天台の「法性—無明」の二元対立とその弁証法的統一の問題として2500年以上に亘る東西思想史的課題として重要性を有し、その比較構造分析の立場から解明すべきテーマとしても取り上げ、その関連する文献の書評等も行った。

(3) 2011年度夏季期間はケンブリッジ大学に客員研究員として、及びミュンヘン大学、更にヘーゲルの資料のあるベルリン国立図書館においてそれぞれ関係文献資料の調査研究を行った。

国内では上智大学での第8回国際ホワイトヘッド会議において「田辺哲学の観点から見た歴史と永遠」について英語で研究発表を行った。そもそも西田・田辺哲学はホワイトヘッドのプロセス思想と極めて親近性を示し、特にその西田哲学との関連性については従来も多く研究されてきたが、その田辺哲学との比較・関連についての研究は少ない現状からして、しかも田辺

自身直接ホワイトヘッドの思想内容にも言及しており、また共に数学・物理学を背景とした共通の科学哲学的立場からも甚だ比較の意義が大きい。ホワイトヘッドの「新しさへの創造的前進」の概念は、西田・田辺哲学に通底する仏教の「空」の「空をも亦復空ずる」という不断の否定的媒介のダイナミズムの過程と一致するが、他方ホワイトヘッドにおいては永遠性の要素はその「永遠的客体」の概念に見られるものの、それはプラトンの普遍的イデアに親近なものであって、その意味で未だ相対性を脱せず、真に歴史を超越する絶対的永遠性には到達していないという点についても、仏教哲学のダルマ「法」概念との比較においても検討した。その意味で、歴史よりもむしろ自然をより背景とするホワイトヘッドのプロセス思想の意義を田辺後期科学哲学における相対性理論の弁証法的構造、及びその量子力学との統一の問題に関しても比較考察した。

歴史の問題に関しては、既にハイデッガーの後期思想が特に「存在の歴史」として歴史的視野から捉えられ、ハーバーマスが評するように「時間化された根源性の哲学」として西洋形而上学の歴史を古代ギリシャの元初からの頹落の歴史として捉え、その終末たる現代において、その元初の根底に隠されたより根源的な元初を回復すべく、新たな「別の元初」の開頭を希求するという構図を示す。この点で、ハイデッガー思想の背景・前提にはキリスト教神学の終末論があり、更にその世俗版としてのヘーゲルの歴史哲学も潜在していると見られる。ハイデッガー後期の中心概念「性起」(原生起)も神の出来事としての受肉のそれを背景とし、同時代の神学者カール・バルトの「原歴史」概念、及び啓示と秘匿との弁証法とも密接な関係にある。バルトには終末論は希薄であるが、ハイデッガーの「性起」(原生起)とバルトの「原歴史」との比較関連についても考察し、関連文献の書評も行った。また西田・田辺哲学の形成に大きな影響を及ぼしたヘーゲルの弁証法は水平弁証法として歴史哲学へと展開されるが、この点で西田の「絶対無の場所」の弁証法、田辺の「否定的転換」の弁証法、ホワイトヘッドの「過程」の構造との比較も試みた。

また田辺哲学研究会を数回催し、法哲学的、言語哲学的、文献学的解釈学的諸側面についても各専門の関係者と意見交換を行った。

4. 研究成果

西田・田辺哲学の歴史的背景・起源、及びハイデッガーの元初論、ホワイトヘッドの主體的生成と客體的有との交互的否定転換等と田辺の「種の論理」との比較については英文にて外国雑誌に発表し、また田辺における永遠と歴史との行為的統一の弁証法についても国際学会で発表した。更に仏教的背景としての天台哲学とスウェーデン・ウプサラ学派の宗教哲学との比較

も国際学会で発表した。国内学会では田辺及びその東洋的伝統背景とホワイトヘッドとの比較を発表し、ハイデッガーの元初論と仏教思想との類同性の構造比較も邦文にて発表した。特に田辺哲学の潜在的な世界史的意義を発揚すべく、英文による発表は比較思想史的研究の上で国際的にも重要な意義を開示した。

又ハイデッガーの高弟ガダマーは哲学的解釈学の先駆として著名であるが、その文献解釈学の方法論はフーコーの方法論と共にテキスト解釈において重要な役割を果たし、比較思想史的研究においても方法論的反省と方向性を示唆するところ少なくなく、その意義や役割等についても広く一般的に文献と思想との関係性を闡明する上で重要であり、この方面においても考察を加えた。しかし、ガダマーについての研究は緒に付いたばかりで、その多くは今後に期待される。特に西田・田辺哲学の根本概念たる「絶対無」、「絶対矛盾的自己同一」、「否定的転換」等の仏教思想的背景として、彼等自身の時代制約的限界を超えて、更に仏典及びその解釈学的方法論についても、ハイデッガーの非隠蔽性としての真理観—「隠れと現れ」の二重構造の開頭プロセス—との関連からも比較考察を深めた。

又田辺の後期乃至晩年におけるマルルメ等に関する芸術哲学は、ハイデッガー後期の中心問題でもあり、田辺はハイデッガーの芸術的態度に対しては観想的として批判的であったが、田辺自身最終的局面においてはむしろ芸術への転回も見られ、またホワイトヘッドのプロセス観も審美的意識が濃厚であり、更に詩と言語との関係も重要なテーマをなし、これら一連の問題に対しても比較考察を加え、ホワイトヘッド・プロセス学会のシンポジウムにおいて発言を行った。

又ヘーゲルの法哲学が歴史的現実を対象とするように、田辺哲学は国家存在という歴史的現実を主要なテーマとし、その「種の論理」の弁証法的立場から現実の政治問題についても発言を呈したわけであるが、そのような視点からも、現今のグローバル世界における政治経済にわたる歴史的現実の危機の問題に対しても、その危機の構造を哲学的観点から「同一性と差異」の論理を中心として、古代の易の陰陽の対称性と非対称性との関係性に淵源する思想史的パースペクティブからも、又ヘーゲルの「同一性と非同一性との同一性」の弁証法論理をも媒介として、西田・田辺哲学の弁証法的思考にも比較関連しながら、考察を加えた。

しかしながら、特に歴史哲学に関して、田辺哲学は瞬間的進出即還帰、遡源即発展、始元即終末をいうものの、点的現在中心史観に限定され、ヘーゲルの自己否定を通じて原初へ還帰する運動、ハイデッガーの最初と別の元初、ホワイトヘッドの持続的時間等との関連において、幅と持続性、歴史の起源と目的、文化価値の進歩と衰退、等との方向性において更に脱構築す

べきことが指摘される。

更に今後の展望としては、来年(2013年)ギリシャのアテネで開催される予定の世界哲学会議において、従来も数回にわたって発表してきたように、田辺哲学について英文による発表を行う予定であり、又同年にポーランドのクラコフで開催予定の国際ホワイトヘッド会議でも田辺哲学とホワイトヘッドとの比較研究について発表する予定である。更に最近アメリカ哲学会よりアジア哲学に関する著作『無の思想』を刊行する計画があり、田辺哲学、特にその類・種・個の弁証法について英文による論文の執筆依頼を受け、近い将来出版される見通しである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

- ① 尾崎誠、ホワイトヘッドのプロセス概念と東洋思想について、プロセス思想、査読有、14号、2010、111-124。
URL: www.whitehead-japan.com
- ② 尾崎誠、ハイデッガーと法華思想、法華仏教研究、査読無、6号、2010、216-226。
- ③ 尾崎誠、文と解釈、法華仏教研究、査読無、3号、2010、150-161。
- ④ 尾崎誠、Action, History, and Eternity in Tanabe's Philosophy, 査読有、Parerga: Miedzynarodwe Studia Filozoficzne, (Warsaw Financial Univ.), No. 3, 2010, 49-54。
URL: www.parerga.vizja.pl
- ⑤ 尾崎誠、The historical origins of the philosophies of nishida and tanabe, Parerga: Miedzynarodwe Studia Filozoficzne, (Warsaw Financial Univ.), 査読有、No. 4, 2009, 125-131。
URL: www.parerga.vizja.pl
- ⑥ 尾崎誠、文明と仏典のナゾ、法華仏教研究、査読無、1号、2009、37-45。

[学会発表] (計 5 件)

- ① 尾崎誠、History and Eternity from Tanabe's Perspective, 第8回国際ホワイトヘッド会議エコ・ソフィア。シンポジウム2011、2011年9月27日、上智大学(東京)
- ② 尾崎誠、ホワイトヘッドの芸術論、第32回日本ホワイトヘッド・プロセス学会シンポジウム、2010年9月18日、徳島文理大学(徳島市)
- ③ 尾崎誠、Religion and Politics in terms of Tanabe's Dialectic of Species, 第20回国際宗教学宗教学史学会世界大会、2010年8月19日、トロント大学(カナダ)
URL: <http://iahr2010.blogspot.com/>

- ④ 尾崎誠、Bostreom's Philosophy and Tendai Buddhist Thought, 第20回国際宗教学宗教学史学会世界大会、2010年8月19日、トロント大学(カナダ)

URL: <http://iahr2010.blogspot.com/>

- ⑤ 尾崎誠、ホワイトヘッドの汎心理主義と東洋思想、第31回日本ホワイトヘッド・プロセス学会、2009年10月25日、中央大学(多摩)

[図書] (計 1 件)

- ① 呉汝均、陳偉分 主編、台湾国立中央研究院中国文哲研究所、跨文化視野下的東亞宗教傳統: 当代新儒學與京都學派、2011、pp.185-197。

6. 研究組織

- (1) 研究代表者 尾崎 誠
(Ozaki Makoto)

研究者番号: 00259574

- (2) 研究分担者
()

研究者番号:

- (3) 連携研究者
()

研究者番号:

- (4) 研究協力者

- ① ジュリアス・リプナー、
(Prof. Dr. Julius Lipner)
ケンブリッジ大学前神学部長・教授
- ② ヨハネス・ラウベ、
(Prof. Dr. Johannes Laube)
ミュンヘン大学元日本学研究所長・
名誉教授
- ③ ダウウェ・ティメルスマ
(Prof. Dr. Douwe Tiemersma)
エラスムス・ロッテルダム大学元教授

